
生きる

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きる

【Nコード】

N4639A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

武家の家系に生まれた少女・セツナは、国王側近の軍・禁軍に籍を置く父に憧れて武道を志していくうち、腕利きの女剣士として名を馳せるようになる。傭兵として軍に雇われた彼女は、そこでライゾという青年と出会い、恋に堕ちるのだが……！？異界ラブストーリー、再び！

追憶（前書き）

これは元もと『生きる』というタイトルの詩でした。

ふと目に付いたので小説化してみることにしたんです。

短編のつもりでしたが、プロットが進む進む（笑）

どの作品とも違う物なので、楽しんで読んでいただければ、幸いです。

追憶

1章 追憶

嘗てあたしは、一兵卒として戦場を駆けていた。

『朱髪のセツナ』……それが、腕利きの女剣士としての、あたしの通り名だった。

「もう迷わないって、決めたんだよ」

なのに……。

なのに、あの夏の残像が離れないんだ。

……目を閉じれば、鮮やかに蘇る戦場の業火。もう、一年ほどになるか。

隣国で戦があった、それは惨い……大がかりな殲滅戦だった。

セツナは元より、この国・七つ国がうちの一つである棠国・荊州けいしゅうの武家の出であった。

代々女系のセツナの家族は、男女関わらずに武芸を学び、鋭気を養っていた。

『父上、あの技見せてくれ!』

屋敷の裏庭にある稽古場に、元気な声が響く。

『いいぞ……見てろよ?』

ピコピコと飛び跳ねてまわる愛娘に、若い父親は笑みを深くする。

彼は、燃え盛る業火の如く……という形容が似合う、見事な朱髪の青年だった。

『跋鬼伏邪……破妖陣っ!!』

刀が、妖気を噴いた。

稽古場の藁人形が、微塵に粉碎されて木っ端が散る。

『凄い！ あたしも、父上みたいに強くなるっ』

『よし、それでこそ俺の娘だ』

幼いセツナは、大きく強い父が大好きだった。

セツナは知らなかったが、彼女の父親は七つ国は、棠国禁軍の將軍の席にいた。

『父上、もう出かけてしまうのか？』

『ごめんな、父さま急な仕事が入ったんだ』

項垂れた愛娘の頭を、彼はわしわしと撫で回す。

『父上……』

職務柄、元々長く家を空けることが多かった彼は……遂に、本当に帰ってこなくなった。

棠国と胡国、両者間に大戦が勃発したのである。

理由は知らねど、帰ってこなかった父の後を継いで、セツナは剣士として生きる道を選んだのだった。

そして……下積みの時期を経て、セツナは傭兵として戦場を駆け回るようになった。

強くあろう。

強く在らねば。

（強くなろう……父上に恥じぬよう！）

出逢い（前書き）

軍部に属することになったセツナは、ある日、ライゾという青年に出逢う。

初めてできた友に、彼女の心は弾んでいた。

出逢い

そうして、季節は廻りゆき。

「セツナ殿……でありますか。主上から、国命を預かって参りました」

寒空の元、寒風が吹き荒ぶ頃に、セツナは兵士として召集を承けた。棠国の公主が、帰還したらしいのだ。

軍部に属することとなり、暮らしは他の兵卒と同じ、定められた兵舎での暮らし。

女ばかりで暮らしていたセツナにとって、あまり暮らしよいとは言えない環境だった。

なにせ、まわりには当然の如くに男しかいないのである。

初めのうちは、部屋の片隅で獣のように丸くなって休むことが多かった。

刺さる視線。

刺さる陰口。

（男共……視線がウザイぞ。女が、そんなに珍しいか）

女だからと、いらぬ諍いを幾つも買った。

だがその度に、セツナは勝利し、男達を屈服させていた。

朱髪のセツナ……それは、その時に付けられた異名のような物だったが、いつの間にかに定着してしまっていた。

そんなある日のこと……。

セツナは、ある男と出会った。

「おい、お前か……朱髪のセツナとやらは」

厳しい訓練の後、やっとの事で得た安息を破った男を、彼女は思いきり恨めしげに睨みつける。

「なんだ……あんたは。用がないなら去れ、今のあたしは機嫌が悪いんでねっ」

寝転がったまま、セツナは男を突っぱねる。

「噂通りだな、ホントに女だ。女の身で……なぜこんなむさ苦しい処に来た？」

藪から棒に、もっと悪く言えば無遠慮に尋ねてきたこの男を、始めセツナは『絶対、後でシメてやる』と内心でひどくなじっていた。

「あんた……無遠慮すぎ。それに、こっちはあんたの名前を知らない」

「お。そうか？ 名乗ってなかったか。俺はライゾ、あんた……女らしくないな」

「一言余計だぞ……」 (怒)

悪びれず笑う青年・ライゾ。

「まあ、その後で言うのもなんだが……同じ戦友同士、よろしく？」

彼が、セツナの人生を変える者であることを、彼女自身、ライゾさえも知る由のないことだった。

「……ああ」

それから徐々に、二人は溝を埋めていくことになる。

互いに技を競い合ったり、思いやり合う姿は、良くも悪くも周囲の目を惹いた。

出逢い（後書き）

どうも、維月です。

新シリーズ『生きる』のお届けです。

セツナの性格……描いていて面白かったですね。

初登場のライゾ、まだ顔見せ程度ですが、よろしくです。

恋――そして、墜落（前書き）

セツナは、ライゾという青年と出会い：恋に落ちる。
友として出逢った二人だが、予期せぬ変化が！

恋――そして、墜落

軍の訓練で、互いに技を競い合った日の午後、二人は珍しく休暇を貰うけた。

「なんだ、聞きたい事って？」

丘の小道を、肩を並べて行きながら、セツナは尋ねた。

時折吹くそよ風に、彼の明るい金髪が柔らかそうに揺れている。

「セツナ、お前はなぜ強くなろうと思ったんだ？」

一瞬、難しい顔をしてから、ライゾは横の彼女を盗み見た。

「聞きたいのか？」

大樹の木陰に、仰向けに寝転がるセツナとライゾ。

二人の間に、心地よい沈黙がしばらく流れた。

「お前なら、他の道が幾らでもあっただろうに……なぜだ？」

「あたしの家は、代々武家の家柄……強きに男女の差はないというのが家訓でな、父との約束を守るため、この道に來たのもある」

「お前は……それで幸せか？」

「……え？」

ひとしきりの風が、二人の前髪を揺らしていく。

首を横に向けると、驚くほど真摯なライゾの眼差しにぶつかった。

「お前は強い……だが【女】なんだ。無理はしないでくれ」

「なんで……お前にそれを言われなきゃならない」

少しむくれたセツナに、ライゾは屈託なく笑う。

「戦友、だからな」

勢いよく起きあがったライゾは、待ってるよう言い残してどこかへ駆けていってしまった。

「なんだって言うんだ……あ奴は」

呟いた彼女の横顔は、これ以上ないほどに赤くなっていた。

幾ら鈍感なセツナでも、その意味が分からないわけではない。

二人には、長く時を共するうち―――友情以上の感情が生まれ始めていた。

「その花……お前にやる。だから、俺の前だけでいい……女らしくしてくれ」

「ライゾ……？」

俯いている彼の顔は分からないが、おそらくは赤くなっているだろう。

「お前を、愛しちゃった。どうすればいい？ 昼も、夜もお前だけしか見えない」

苦しげにはき出すライゾに、セツナは遂に惑いを捨てて、飛び込んだ。

「悪かった……知らずに、苦しませていたんだな？ もう、苦しくないでいい。あたしは、ライゾの傍を……離れないから」

言ってしまった。

―――遂に、言ってしまった！

これが軍に知れば、もう二度と、この職業には戻れなくなる。セツナは幸福感と、絶望を同時に味わっていた。

「お前を―――愛してる」

「ライゾ……ありがとう」

きつく触れ合う身体。

絡まり合う舌、熱い吐息。

「離すな……あ、たしを……離さな……いでっ」

「くううつ……セツナ……セ、ツナっ」

セツナは、ライゾの褐色の背中に爪を立てて、動かなくなる。

罪と知りながらも、危険な愛と分かっているながらも。
二人は本気で愛し合い、混じり合った。

悲しい歯車（前書き）

ライゾとの恋に燃える一方、兵士たちの間に『あの二人は、デキている』という噂が立ってしまう！

強靱な半面、深く傷つくセツナだが……！？

悲しい歯車

『あの二人は、デキている』

二人を見る、周囲の目が変わった。

『見る、アイツらデキてるんだとよ』

『やっぱりな……俺もそう思った』

『所詮、男と女じゃこんなモンだろ』

まことしやかに囁かれる陰口にもめげず、セツナとライゾは最後の秋を過ごした。

「周りが煩いようだが…気にするな」

夜半、二人は『あの場所』で寄り添っていた。

「あたしを、心配してるのか？」

艶を含んだ声が、ライゾの耳朵を打つ。

「当たり前だろ、昼間の嫌がらせ…もし俺がいなかったら」

「……悪い」

『ライゾを誑かしやがって…このアバズレっ！』

『誰にでもさせるんだろ！？ この娼婦がっ』

兵舎の裏、数人のがたいのいい兵士に囲まれたセツナは、肅正と称して、暴力を受けていた。

『なんとか言えよ、このアマ！』

さも人を殴り馴れていそうな大きな拳が、セツナの白い頬を殴った。その時だった。

『デメエら……そこでなにしてる』

凍った声が、同僚の男達を斬りつける。

(ライゾ……)

『セツナが女だからって、そんな噂まに受けてんだろ！ 差別すんじゃないねえっ』

『噂……そ、そう、単なる噂だよなっ』

男達がすっかりいなくなった後、ライゾは肩を落として、深々と溜息した。

『……平気か？』

『………』

昼間、セツナは数人の男達に囲まれ、『娼婦』と罵りを受けたのだ。騒ぎに駆けつけたライゾが男たちを一蹴したが、セツナは声も出さず、泣きもしなかった。

ただ、歯を食いしばって耐えていたのだった。

「セツナ……約束しよう」

「なんのだ？」

脈絡なしに話を切り出した彼に、セツナは瞠目する。

「大事な約束、だ」

「……？」

「この戦が終わったら……夫婦めおとになろう」

「え？」

「故郷に戻って……子を育てながら、畑を耕して暮らそう」
明らかな、求婚だった。

「あたしは……父上との約束を、果たさないと」

セツナは、ライゾの胸板を押し返して顔を背ける。

「お前は充分強い……いい加減、もうやめろ」

「ライゾ？」

悲しげに笑った彼に、セツナは言葉をなくす。
きつく抱擁する二人を、中天の月が見ていた。

悲しい歯車（後書き）

どうも、維月です。

初めて人間同士の恋を描くので、ちょっと違和感がありますねえ（汗）今回は、セツナが哀れでした……

異変（前書き）

日々の訓練を、効率よくこなしていたセツナ。
だが、そんな彼女を、異変が襲う！
訓練後に倒れた彼女は……！？

異変

日々の訓練を、効率よくこなすセツナ。だが、僅かな違和感を感じ取っていた。きっと風邪でもひいたのだろう。

眩暈に嘔吐、度々の悪寒。

おそらく、それで間違いはない。

それしきで参る身体ではないので、気にしないでいた。

「次っ、セツナとカウル！ ……試合、始めっ」

「……キンッ……！」

昼の白光に、組み合わさった白刃がきらめく。

余裕で相手の攻撃を避けるセツナ、とんぼを切って着地する。

「カウル……女相手だからって、手加減すんなよーっ！」

「大丈夫かな、あのセツナ相手だぞっ？」

「さーあなっ」

じりじりと、間合いを詰めて闘う二人。

拮抗し合う、刀と刀。

目には見えないが、二人の間には苛烈な火花が散っている。

（こ、この女ッ……やはり言われるだけはある！）

気持ち反映されているのか、カウルは押され気味で、後退しつつあった。

「どうした……もう終いか？」

ニヤ、と嫣然と笑ったセツナに、カウルはたじろぐ。

「くっ……！」

野次を飛ばしている仲間の中に、まっすぐにセツナを見つめているライゾがいる。

二人は目配せし合う。

(よし、行けっ！)

(ライゾ……あたし、勝つよっ！)

ひとしきりの金属音、これで、勝負は付いた。

石青の彼方に弾かれた刀が、練兵場の片隅に突き刺さる。

「ああ……」ほら、やっぱりな。セツナにや、ライゾ以外かなわねえよ」

野次も半分だが、沸き上がる歓声。

そうして、セツナは勝利を収めた。

風の匂いが変わった。

冬が、死にゆく匂いだ。

季節の変化は感じる事ができ、自らの変化に気づけなかったセツナは、突如の不調に耐える力がなかった。

「セツナが倒れたぞ！」

「おいっ、セツナ！　しっかりしろ、救護班、早く！」

倒れ伏したセツナを抱きあげ、ライゾは必死に怒鳴った。

なんと……。

……セツナは、身籠もっていた！

異変（後書き）

うゝん……戦闘シーンが、難しい（＜――＞）

愛ゆえの死（前書き）

戦場を駆け抜けるセツナとライゾ。
だが、激戦の果てにセツナは――！？

愛ゆえの死

「……あたしは……」

セツナが目を開くと、そこは軍の医務室だった。

午後の日が翳っている、大分眠っていたようだ。

壁の、無機質な白が橙に染まって見えた。

「気がついたか。お前……心配させんなよな。単なる脳震盪でよかったぞ」

逆光に浮かび上がる、愛しい男の姿を見て、セツナは弱々しく微笑んだ。

「……ずっと、傍にいてくれたのか？」

渋い顔のライゾに、セツナは手を伸ばす。

「バカ……俺が見捨てるかよ」

「そう、だな」

セツナの頬を、一筋涙が伝う。

「どうした……まだ、どこか痛むのか？」

「……いや」

分かってしまった。

分かってしまったのだ。

いま、自分の身になにが起こっているのか。

もう、こればかりは……誤魔化すことができない。

「ライゾ……話がある。聞いてくれるか」

「……セツナ？」

「あたしは……」

彼女は、自らが身籠もっていることを、ライゾに告げた。

内心冷や汗ものだったが、彼は涙を流しながら、自分を抱き締めてくれた。

絶対突き放される、と悩んでいたのに……意外な反応だった。

「ライゾ……本当に、喜んでくれるのか？ 軍に知れば、あたしも、お前もただじゃ済まなくなるってのに」

「バカ……なんで、喜ばずにいられるんだよ」

セツナを抱き締めるライゾの頬を、幾筋も涙が伝いおちては散る。

「ごめん、ごめん……言ったら、お前が離れていくかと……距離を置くと思ったんだ」

「よかった……遂に、俺たちを繋ぐ者ができたか」

これで…… 譬え、どんなに離れても……どちらにも寂しい思いをさせずに済む。

ライゾは、至福の時を噛みしめていた。

「けど、これだけ言っておくぞ？ あたしは戦線を離れるつもりはないからな」

だが喜びも束の間、ライゾはその耳を疑うことになる。

「なっ……っ！」

「お前だけ闘わせられるかっ！！ ずっと……一緒に決めたらう？」

「分かった、分かったから怒鳴るなっ、腹の子に障る」

「よろしい」

嫣然と微笑む愛しい戦姫に、ライゾはぱちんと額を押さえた。

「はっ……全くお前じゃ敵わんよ。それにしてもな、ホントにここに俺たちの子がいるなんて。夢みたいだぞ」

ライゾは、まだ目立たないセツナの腹に耳を寄せ、目を閉じながら呟いた。

「夢じゃない。夢じゃないよ……確かに、ここに『生きてる』」

その数ヶ月後、二人は軍と共に、棠国王の膝元……戦線へと赴いた。

それはひどい……ひどい戦だった。

尽きることなく、天地を焦がす業火は容赦なく襲い掛かり、体力と気迫を摩耗させていく。

それは両国の兵も同じ事で……。

膝を突く者。その脇で力尽きる者。気が触れて、自刃する者……様々だ。

戦場は：鬨と血で、朱に染まる。

爆炎と斬撃の中を二人は駆け抜けていた。

「セツナ、平気か！」

「ライゾ、お前こそっ！」

向かってくる敵兵の群れを斬り抜け、どのくらい経っただろう？
あたりは……閑地は血と火薬……生き物の焼ける匂いで満ちていた。

闇が閑地わだかまに蟠る頃、戦場は死に絶えたように静まりかえる。

月光さえざえと……。

力尽きた、同志たちの骸の脇に刺さる刀に宿る露が、憐れを誘う。

セツナは、死んだように目を閉じ、息を殺していた。

「セツナ……しっかりしろ、セツナ」

「ライゾ……お前こそ平気か？ 肩、痛むだろう」

彼女たちを残して、ほぼ壊滅した棠軍に替わり、向かってくる敵兵の殆どを倒したのはセツナだ。

倒したのは殆どで、全てではない。

今は、休戦状態で、両者の状況を伺っているのである。

――夜明けが、最期の闘いの合図となる。

両者ともに、体力の消耗が激しい。

「少し、休んだらどうだ。心配ない、あたしがライゾを護ってみせるさ」

「お前は……？」

「あたしなら大丈夫だ。休んでくれ」

夜明けまで、まだかなりの時間がある。

セツナは元々眠りは浅い方で、ある程度休めば問題ないのだ。

「いや、だが……」

「頼む、休んでくれ。お前を愛してるから言ってるんだぞ？」

眉尻を下げるセツナに、ライゾは思いきり赤面してしまう。

「ふっ、不謹慎だぞ！」

「今は…休んでくれ。な？」

膝枕に乗った彼の頭を抱き締め、セツナは、そっとその額に口づけた。

「早く、故郷に戻りたいものだな」

呟いたセツナに、ライゾは静かに尋ねた。

「セツナは、どこ出身だ？」

「棠国あんようけんの、杏楊県だ」

棠国……杏楊県。

海ぎわの、景色のよい、穏やかで小さな村だ。

「同じだ。どこかで…すれ違っていたかもしれない」

微笑むセツナを、ライゾは起きあがって強く抱き締めた。

「生きろセツナ……いや『生きる』んだ」

「ライゾ？」

背を伝う、冷たい汗。

水色の地平に、一條の光が射す。

「夜明けだ……相手が動く前に、俺が斬り込む」

「お前、なぜっ」

「もう決めていたんだ、お前には生きてもらおうと」

「ライゾ!? バカ言うなっ、あたしたちは一緒だろっ」

ゆるゆると首を振るライゾに、セツナはしがみつく。

「お前は『生きる』んだ。譬え俺が死んでも、お前は独りじゃない」

「バカなことをっ……簡単に、死ぬなんて言うんじゃない!」

「泣いているヒマはないぞ? 敵は目の前だ」

にい、と笑うライゾに、セツナは涙を拭い去った。

「分かってるっ!!」

戦況は、良いように思われた。

だが……。

一緒だと…命尽きるまで一緒だと決めたのに。

現実はまだ、残酷で。

油断したあたしを庇ったライゾを、敵の放った弩^{いしゆみ}が貫いた。

「ライゾっ!? ……ライゾ!」

飛沫く血は、天井の華の如くに美しく。

ライゾは激しく噎せてから、夥しい血を吐いた。

「セツ……ナ」

セツナの中で、『なにか』が切れた。

激情が、瞳の色を、髪を染め上げていく。

「ライゾ……っ!?」

ライゾを脇に抱えた彼女が、敵軍を殲滅するまで、いくらも掛からなかったように思う。

もはや激昂する彼女以外、命の気配はないようだった。

「ライゾ……あたしは、お前を、護れなかった」

擦りむけて汚れたセツナの頬を、涙が伝いおちる。

ぱたぱたと落ちるは、銀の雫。

それを受け止めたのは、ライゾの頬だった。

「セツナ……お前、泣いて、いるのか？」

「す、まない……ライゾ……血が、血が止まらないんだっ」

肩を縛って止血しようとするが、夥しい血糊は留まるところを知らず、彼女の白い手を汚すのみだ。

「セツナ、生きろ……生きるんだ。そして、決して自分を恨むな。

お前は……強い女だ」

「しっかりとしないかっ！ 帰るんだろっ？！ 一緒に故郷にっ」

弱々しく、ライゾの手が、セツナの頬に触れられる。

彼の命の火は、尽きようとしていた。

「愛してる……俺の、大切な、妻……そ、して戦友よ」

「行くなっ、死ぬんじゃないっ……ライゾ、ライゾ！？」

「生き……ろ」

ライゾの腕が、力なく地をうつ。

「お前のいない一生なんか、送りたいくない！ 置いていくなっ」

取り落とした刀を拾おうとした瞬間、天地が歪むほどの眩暈が、セツナを襲った。

「くふ……うつ……ぐうう、おえ……おええっ……！！」

ひどい匂いの胃液を、セツナは何度も吐瀉する。

悪阻だ。

まるで、命の断絶を拒むように。

セツナの胎内に宿るライゾが、彼女を諫めたかのようにだった。

「ライゾ……お前なのか？ 生きろって、言ってるの……か？」

冷たくなったライゾを抱え、セツナは泣いた。

大地が拉ぐほどの、大声で。

まだ冬も明け切らない、晩冬のことだった。

愛ゆえの死（後書き）

こんばんわ、維月です。

『生きる』を読んでくださった読者様、おつきあいくださいましてありがとうございます。

次回で、『生きる』最終章となります。

よろしければ、次回も、おつきあいくださいませ。

エピローグ（前書き）

あれから6年が過ぎた。場所は――――、棠国・合同墓所。
ライゾの墓前で、セツナは息子と共に手を合わせていた。

エピローグ

ライゾ……。

あたしの腕で、息を引き取ったあの顔が――――まだ忘れられない。

あたしを庇い、散った。

強く、誉れ高き戦友よ……。

自分を恨むなど、今際に残したのは――――いまの、この為だったのか。

「母上、だっこ！」

「仕方ないな、おいで……」

機敏な足取りで走り寄った息子を、セツナはそっと抱きあげてやる。

「ごらん……お前の、父上だよ」

「父上？」

その肩ごしに、息子が呟いた。

「そうだ、お前は……本当にあ奴そっくりだよ」

クシャクシャと、セツナは懐かしむように、彼の父譲りである明るい金髪を撫でた。

セツナは、戦線から退いた半年後、故郷に戻り、ライゾの子を産んだ。

彼女の家族は、腹の子を責めるよりも、まず戦線から無事に帰還した娘をきつく抱き締めた。

血縁者たちは予想以上の激戦に、彼女は若くして散った父親のように、そのまま戻らぬと諦めていたのだ。

それだからこそ、命あってなによりと、それ以上の追求はされずに終わった。

「ライゾ……結局、お前に護られてしまったな」

抹香の煙が薄くたなびく中、セツナは墓石に水をかける。
ひとしきりの風に、供えた白い桔梗が揺れる。

陽が翳り始め、墓所を囲む木々がすすり泣くようにざわめいた。

「母上、泣いてるのか？」

父と同じ名を持つ息子が、屈み込んだセツナの袖を引いた。

「ライゾ……」

「俺も、強くなるよ。強くなって、母上を護る」

「そうだな」

あれから、もう6年経った。

短かった髪も、もう大分伸びたよ。

なあ、ライゾ……。

もう二度と会えないけれど、お前は大切な者をあたしに託してくれ
たな。

この子……『ライゾ』だ。

この子、仕種からなにまで、お前にそっくりだぞ。

名前もお前の名を貰ったよ。

『生きる』

そうだな、生きなきゃ。

コイツを、育てねばならんからなあ。

もう迷わずに、生きていけるよ。

きつと、独りなら生きていけなかった。

ライゾがいたから、お前が命をくれたから。

あたしはまた、故郷の風を感じられた。

お前を思うと、正直いまでも痛い。

けど、お前は言ったよな？

『生きる、そしてお前は強い女』だと。

それは、お前がいてくれたからだよ。

お前がいてくれたからこそ、いまのあたしの命がある。

あたしこそ礼を言う。

「ありがとう」

「母上、笑ってくれ。そしたら、俺も嬉しいから」

「本当に、ライゾ……ありがとう」

よき友、そして…夫として。

あたしは、生涯お前を忘れないだろう。

お前があたしを愛してくれたように、あたしもお前を愛する。

なあ、ライゾ。

桔梗の花言葉はな、『永遠の愛』というそうだ。

この命続くまで誓うよ。

戦友よ、安らかに眠ってくれ。

エピローグ（後書き）

どうも、維月です。

『生きる』最終章のお届けにあがりました。

ここまで読んでくださった読者の皆様、お疲れ様でした、ありがとうございます。

セツナはその後、息子の成人を見送ってから幸せな余生を送りました。（＾―＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4639a/>

生きる

2010年10月9日05時08分発行